

忘れられた世代
—戦争を知る子供たちが、沈黙を破る—
(ザビーネ・ボーデ著)

菅 野 ゆりか

目次

前書き

謝辞

はじめに

第一章 身近にいる何百万人もの戦時に子供だった人々

冷戦が阻んだもの

明るく輝くセミナー

ナチスの過去と戦争の過去

立派な世代

幻の症例「自律神経失調症」

記憶はどこにあるのか？

私たちは何年も地下室に座っていた

戦争が終わったら、生への不安が襲ってきた

第二章 子供たちがもたらしていたかも知れないこと

用心深い老人

父親のいない子供たち

帰還者たちの苦境と怒り

症例「栄養失調」

かつての助言者「避難民の子供たち」

第三章 沈黙した、未発見の世界

ドイツが飢えていたとき

調べる、計る、測る

「今は昔よりも愚か？」

シェルスキーが見つけたもの

思春期に遅れて現れた戦争の影響
興味を持たれない世代

第四章 二人の女性による総括

二度と戦争が起こらないように、という願い
祖母と孫娘
深く刻み込まれた飢えの印象
常に救助体制で、ほとんど眠らない
そしてひたすら生き延びる
蚊に刺されてパニック
最小限の年金
病を治した夢

第五章 快活な子供

プロイセンの小さな子供はすべてに耐える
飢えることと忘れること
心理分析の役割
心が壊れると
希望の光とひょうきん者
愉快的気分

第六章 全国民の移動

基点としての失われた故郷
避難中に生まれる
母にはいつも感謝
ドイツの大半はまだ途上
何も知らない村の住民
熾烈な配給の取り合い
勇敢な12歳の少女
「おそろしい、でもいいこともたくさん」
部屋が寒すぎたからベッドに
歩いてテューリングゲンからルール地方へ
最後の手紙

第七章 戦争孤児：思い出さがし

行方不明になった子供たち
デンマークのこども保護施設

連邦軍での新たな出発
一つの東西ドイツ史
母親と祖母は空腹だった
思いやりのある娘
小さな手荷物一つで一人西側へ

第八章 ナチス教育：ヒトラーに進んで従う母親たち
ヨハンナ・ハーラーの学校
「虚弱の芽を摘みなさい！」
「その子供の臭いをかくことはできない」
ナチ母との口論
どのように小さいヴォルフは生きる喜びを失くしたのか
女の子も泣いてはいけない！

第九章 「本当に、本当に優しい人間になろう」
子供たちが餌食になるとき
ボロ着をまとった物乞いの国民
すべてを正当化する神
帰還者のための贖罪式
死のうとする、そして天国へ行く
「私にはもう両親はいない」
症状の突発と新たな門出
ストレスが彼女を忘れっぽくさせる
「私たちの代わりの両親を見つけなさい！」

第十章 トラウマ、戦争、そして脳研究
個人の崩壊
鉄道で始まった
法医学者が警告を鳴らした
塹壕での大量死
世界中に広まるトラウマ研究
子供が本能的に知っていること
セラピストの知識は十分か？
言葉の喪失

第十一章 大変な茫然自失
ある爆撃のあとで

厄介な歩み
小さな錠剤の宣伝
爆撃中は指で耳を塞ぐこと
死の不安に効く錠剤
障害とともに生きる

第十二章 年寄りとして幸せになる

二つの子供時代：ハノとカスパール
演劇を愛する息子
両親の戦争恐怖を受け継いで
父と息子－二人の学友のように
ある統合失調傾向のエピソード
優しさの終わり
治療は可能

第十三章 絶望的な家庭

悲しみのない別れの歌
両親と子供たちは仲良くなれなかった
まったくの無関心
「集団的秘密」
とりわけ新しいものを退かせる両親
二人の避難民の子供たち
一人の石工が腹を立ててすべてを投げ捨てる
「私たちは完全無欠の家族」
逝った者を悼むことがない

第十四章 理性と弔いのための弁明

どのように戦争の恐怖を回想するか
嘆いてはいけない、弔いなさい。
偉大な演説の効果
追悼式による心の開放
一つの儀式がその効果を発揮する
ミサの妨害
「トラウマの文化」
生き延びることが共通のアイデンティティーを作るとしたら
「私たちは怒りをどうしたのか？」
運命と折り合う

あとがき ルイーゼ・レッデマン

第一章 身近にいる、何百万人もの戦時に子供だった人々

冷戦が阻んだもの

ベルリンの壁崩壊から時間が経てば経つほど、ドイツ連邦共和国では戦後の時代が1989年によりやく終わったということが明確になってくる。再統一によってよりやく戦争がもたらした政治的結果が克服され、数年後明らかになったように、冷戦の重い空気により表面化されなかった社会的なテーマについて考える余地が生み出されたのだ。

東側のイデオロギーに対抗して西側のイデオロギーが持ち出される時は、その反対のケースも同様ののだが、非常に独善的で声高に、威嚇的に語られるために、思慮深さ、微妙なニュアンス、穏やかな口調といったものはすっかり姿を潜めてしまう。西側であれ東側であれドイツ国民の心の中には、数年間に渡る高度な軍備が生み出す新たな不安が芽生えていて、おそらくはそのために、第二次世界大戦に由来する、人々が共有している脅迫感というものが、実際には認識されることなく消化されてしまったのだ。50年以上もドイツの両国家では、その戦争が精神的に残していったものについて、ほとんど考えられることはなかった、と言ってもいいだろう。70年代と80年代に生の不安に苛まれていた西ドイツの人間は、彼らを取り巻く個々の社会的環境によって、ノイローゼであるとみなされたり、あるいは東西両ブロックの軍備競争の狂気を単に長いこと排除できなかった敏感な同時代人とみなされた。東ドイツでは、SED（ドイツ社会主義統一党）が凝り固まった方向に国民を誘導し、当の国民は「無敵のソヴィエト権力」の存在を信じ込むほうがいい、そうすれば自分たちが怖れを感じる理由もなくなると思っていたのだ。

いわゆるNATOのダブル決議を巡る、ケルンでの討論会が最高潮に達したとき、一人の主婦がマイクに向かって叫んだ。「今じゃすでに、コンピューター上のちょっとしたことが第三次世界大戦を引き起こしかねないじゃないですか！」馬鹿げた誇張だろうか。今や私たちは情報を自由に収集できるが、その情報はいずれその女性の主張どおりになっていくのだ。原子爆弾の投下を命じる誤った警告が発せられていたとしたら、状況の判断と予想され得る最大級の災害を阻止するための時間は、きっかり20分残されていたただけだったであろう。

私自身とは言えば、戦後世代の例の年代、つまりどの政治的テーマが旬であるかによって、「戦争は繰り返すな！」と「アウシュヴィッツは二度と繰り返すな！」との間を揺れ動く年代に属している。私たちが冷戦時代の子供であったことが次第に私の意識に上ってきたのは、この時代が最終的に終わった時であった。つまり一義的な論証、盲目的な過ちというものが、社会の他の人々と比べて多すぎもせず少なすぎもしなかったということである。例えば、私がかつて所属していた、キリスト教精神を支柱としていた平和グループの中で、ロシア人に対する恐怖心もまたトラウマ経験を基にしているのではないだろうかという考察がされた事実を、私は覚えていないのだ。

明るく輝くセミナー

90年代初頭、私の物の見方は変わった。当時私は、非常に明るいあるセミナーを訪れたのだが、そこで突然、その10年前にラジオで聞いた興奮しきった女性の声を思い出した。「ロシア

人から身を守るためだったら私は何でもします。うちの前庭にミサイルだって設置しますよ！」と叫んでいた女性の声を。

このセミナーでは、ドイツ再統一を機に、ドイツ史の背景を考える前に各自の家族史をより正確に観察することをテーマに取り上げた。自分の父母や祖父母とナチスとの距離は、実は彼ら自身が主張していたより近いのではないかと恐れていたのは、私一人ではなかった。では実際に4日間のセミナー期間中に立証されたものとは何なのだろう。

準備段階で私たちは家族研究に取り組んでいた。すなわち1930年から1950年にかけて、比較的近い親類内で起きた出来事 ― 例えば出生、病気、死、引越し、転職、戦線への動員、負傷など ― についての資料や要因を集めたのだ。参加者はみな、いかに自分たちが家族のことを知らなかったかという事実には驚いた。これが最初の共通点であった。第二の共通点は以下のことである。私たちは確かに、ナチス時代に自分たちの両親がどういう態度を取り、どのような職務を遂行していたのかに関してはよく知っていたが、「戦争」が家族内に引き起こしていたことに関して、感情的には実際のところほとんど理解できていなかったのだ。

セミナー参加者の何人かは戦争を子供時代に体験していた。けれども彼らの子供たちの世代にとっても、例えば両親が、逃亡、飢餓、爆弾、あるいは家族を失うことがトラウマとなっていたとすれば、戦争は自分史を決定づける重要な要素だったであろうということは、分かっているのだ。12人のセミナー参加者の全員が、家族内に起きた暴力について一つは知っていた。キーワードとなるのは、爆撃、揺れ、戦死、行方不明、逃亡、追放、暴力、逮捕、自殺である。戦争で亡くした身近な親戚の者の数は、いずれにせよセミナー参加者の数を越えていた。このセミナーで私が確信したのは、その参加者たちがドイツの平均的な家族を代表しており、家族がことさらひどい災難に巻き込まれた人たちではないということである。

ナチスの過去と戦争の過去

三日目は弔いセミナーになった。果てしない慟哭があった。あまりにも衝撃を受けた出来事が50年後に明るみに出されたのだ。その時以来明らかになったのは、私たちドイツ人には、ナチスの過去と戦争の過去の二つがあることである。一つについてはこれまでの間にオープンに語られているが、もう一つの過去についてはようやく意見交換が始まった。それでもこの戦争中に子供だった人はまだ物怖じして、自分の家庭史を匿名で公表することを望んだ。

もちろんナチスの過去と戦争の過去を分離させるのは、やや作為的であろう。けれども私たちはそれをしないわけにはいかない。なぜなら戦時に子供であった人々の運命は、ほとんど60年もの長い間、ナチスの犯罪の影に隠されてきたからである。子供たちの世代は親たちの数倍も、自分たちがヒトラーに権力の掌握を許した国民の一人であるという事実苦しめられていた。恥の知覚と沈黙という態度が、暴力や喪失によって受けた自らの精神的な傷に近づくのを阻んだのだ。多くの戦時に子供だった人々は、自分たちが犠牲者だなどとは考えもしない。一年や二年という長い時間、ずっと地下防空壕の中でうずくまっていた時でさえも、そんなふうには考えもしなかった。

私たちは今、ある社会的過程の発端にいる。その過程が示唆しているのは、60年代にアレク

サンダー&マルガレーテ・ミッチャーリヒによって診断を下された「悲しみ不能」という症状が、今日に至るまで私たちに影響を及ぼしていることと、その症状はナチス時代のことだけではなく、戦後の影響にも関係しているという二点である。

しばらく会わずにいた知り合いに再会すると、よく私は彼らに「今は何の研究をしてるの？」と聞かれる。私はその度に、たいていはうまくいかないのだが、誤解を回避するために、この扱いにくいテーマについて意識的に詳細に説明する。「第二次世界大戦が、戦争当時に子供だったドイツ人の人生に、どのような影響を与えているのかという問題を扱っているの」と。

ある教師のリアクションは典型的なものであった。彼はまさに今、自分の生徒たちに繰り返しアンネ・フランクとショル兄妹の考え方を伝え、それに馴染ませようとしていると熱弁をふるった。教育者として、ナチスの過去を伝えることに多くの時間を費やさなければならないと。

結局その教師は、私の本来のテーマを理解してからは、次のようにまくし立てて攻撃に転じた。「戦争の時代とナチスの時代を分離させるなど、どうしてできるんだ？不可能に決まっているじゃないか！何か私が物事の側面を取り違えてたとしても？私にとって大事なものは、ドイツ人を犠牲者であると定式化することだとも言えるのかい？」と。

「あなた自身、1940年にベルリンに生まれたのでしょ？」と私は言った。「あなたを子供時代に決定づけていたものは何？ナチス？それとも爆弾と飢え？」

相手は怒り出した。「まだ分からないのか？！ナチスがいなけりゃ、私の家族には戦争体験なんてなかったんだよ！」

「私にはこう思われるのだけど」と私はさらに質問を続けた。「あなたは、後になってナチスの恐怖を調査した。戦争中の子供時代にじゃないでしょう？」

「その通り」と彼は認めた。「私が8歳の時、あの戦争は終わった。正直、君が古い歴史を持ち出すものだからイライラして・・・」

しかしある時期の世代、そして部分的にはその子供たちの中に培われた、その沈黙した歴史こそ語られなければならない。それは個人にとって、またヨーロッパ人としてのドイツ人のアイデンティティーと未来にとって重要なのだ。

立派な世代

なぜグードルン・パウマンは、とっくに眼鏡を持っているのに、眼鏡を買わなくてはいけないという夢を見るのだろうか。なぜ逞しいクルト・シェリングは、45歳になって突然絶えず目に涙を浮かべたのだろうか。なぜイスラエルのヴォルフガング・カンペンは、暴力が最高潮に達した時、自爆攻撃に対して恐れなかったのだろうか。今日、第二次世界大戦中にまだ子供であった人々と関わっていくと、妙な疑問が沸いてくる。数百万人の人々である。彼らはすでに一線を退き静かな年金生活を送っているか、あと数年でそうした立場になる人々である。

幼い頃繰り広げられたドラマが変則的に彼らにはひどく応えたのかどうか、実際にはわからない。どうやら彼らは、死、爆弾、追放、そして飢餓の記憶と距離を保っていることに成功したようだ。彼らは以前の同年代の老人たちより傷ついていないし、貧しくもない。むしろ反対である。それまでのドイツでは、今の60代と70代ほど経済的に恵まれているお年寄りはいなかつ

た。彼らは廃墟と化したドイツを再興し、自分の家族を作り、革新派に属していた学生は、ドイツの戦後文化に疑問を呈した。

非常に多忙で有望な世代。その世代は自分たちが生涯をかけて成し遂げてきたことに誇りを持っている。30年代前半生まれの男性を熟知している人なら、彼らが自分たちのタフさをいかに誇りにしているか分かるはずだ。彼らの目には、後の世代の者たちが、自分たちよりもずっと辛抱がないように見えてしまう。

思いやりのある世代。相当高齢の両親の面倒を看るが、孫には甘く、自分の子供たちには、そのうちの一人が失業でもしようものなら、金銭的な援助もすれば言葉で応援もする。この世代の共通点は上述のことでほぼ言い尽くしているのだが、他に挙げるとすれば、このお年寄りたちにとってパンを捨てるのは辛いということだろう。

目立たない世代。彼らのことは全然知られていない。そもそもほとんど語られない。1930年から1945年に生まれた彼ら自身、戦争中の子供時代というものが後の自分の人生をどう形づくったのかを、ようやく考え始めたところだ。それだからこそ興味深い話が聞ける。つまり戦争自体を問題にはしない。なぜなら戦争が恐怖の時代であるなどということは一般的に知られており、私たちは基本的に何も新しいことなど知ることができないからだ。

逆に新しいのは、当時子供だった人々が、自国で60年もの長い間、とにかく見過ごされてきたのではという、ますます大きくなっていく意識である。彼らの運命は興味をもたれなかったし、調査もされなかった。今日、30年代生まれの世代の人に、戦争が自分の人生に与えた影響は何であるのかを尋ねてみると、ひょっとしたら次のような答えを耳にするかも知れない。「私たちは何の被害を受けていませんよ」と。

そんなことがあるだろうか？健康な人間の理性を持っていれば、簡単には信じられない。子供たちは、「水に流そう！」だなどという標語に従って、あれほど多くの暴力や苦痛を押し込めてしまうことができるのか。実際に子供の精神は、一般に考えられているよりずっと傷つきにくいのか。子供たちは非常にタフなのだという、さらに年上の世代の信じている事が、ひょっとしたら正しいのだろうか？考えるにくいことである。そのような事を信じるためには、私たちがこれまで見聞きしてきた幼児、児童の精神的な傷つきやすさについての全知識を捨て去らなくてはならないだろう。

では何が起こったのか。この子供たちは例えば黙り込むように仕向けられたのだろうか？「その通り」と明言したのは、東プロイセン出身のかつて戦争孤児であった人だ。「私たちは幼いころにすでに教え込まれていたんです。そのことについては話さない、語らないのですよ。前を向きなさい！まだ生きていることを喜びなさい。そしてすべてを忘れなさいと。ですから、私たちのほとんどがそのとおりにしたのです。生き残るためには、一生崖っぷちに留まらないためには、順応しなくてはなりません。『私はひどい子供時代を過ごしました。私は子供時代に迫害されたのです』だなどと言えば、その人はただそうした烙印を押されるだけなのです」と彼は言った。

反対に大人たちはみな、小説や手記の中で、戦後まもない時期のことをどう捉え直せばいいものかと嘆いた。それにもかかわらず、その後めざましい復興を成し遂げる（少なくとも西ド

イツにおいて）と、家庭内では戦争のことは語られなくなった。ナチスの犯罪についてはなおさら話題にされなかった。

何度かは、アウトサイダーだけに向けたような不気味に響く簡素な表現に出会った。「うちのクルトは43年にデュッセルドルフで生まれました。うまいこといったものです。二回の爆弾攻撃の間なのですから」。ブラックユーモアは常に、すんでのことで命拾いをした人間の恐怖感を吐露するため、そのはけ口として機能してきたと言える。

幻の症例「自律神経失調症」

誤解が生じないように言っておこう。ドイツでは、戦争による精神的な傷を負った人間がいたということに異論を唱えるものはいなかったのだが、それが多くの人々の間に伝播することもない。フライブルクの心理分析家であり作家のティルマン・モーザー（『魔物』）は、実際に次のように推察している。西ドイツではかの治療活動、つまり戦争の影響に今でも苦しめられている人々のために、押し黙っていると言う鎮痛法の伝授が、他のどの国にもないほどに広がっていた。他の国ではまったく知られていない幻の症例「自律神経失調症」は、60年、70年代の健康保険組合に、治療を承認させるための根拠として十分な病気だったというのだ。

確かに、この戦争中の子供たちは元通り元気になった。それ以上に、押し黙ることで、より早く一般国民に自分たちを適合させたようにみえる。戦後間もない時のいわゆる「廃墟の子供たち」を写した、本書の表紙に使われている写真には、ほろほろの洋服をまとっていても、生きる喜びが顔の表情に現れている幼い子供たちの姿がある。それは、バルカン半島やアフガニスタンのような戦争地域から届けられる写真に載っている憂鬱な子供たちの顔とはまったく違うのだ。

ドイツでは何が異なっていたのか。わかるものなら誰もが知りたいだろう。しかしそれに対しては、研究からはほとんど何も知ることができない。これまで医者、心理学者、歴史家は、この世代に視線を向けないように努めてきた。

それでも時代は変わった。今日では戦時に子供だった世代は、これまでの数十年のように、かなり目立たないわけではなくなった。第二次世界大戦後、初めてドイツ連邦軍が一つの戦争に参加した1998年のコソボ紛争以来、そしてノーベル賞受賞作家のグンター・グラスが、ベストセラーとなった自作『蟹の横歩き』の中で、ドイツ人は今、消化しきれていない自らの戦争の傷に目を向けるべきであると公言して以来、一つのタブーが解禁されたのである。歴史家のイェルク・フリードリッヒが大戦中のドイツへの爆撃を容赦なく描いた『炎上』の中でも、この主張は支持され、驚くべき反響を呼んだ。

老齢になると子供時代が再び身近に蘇ってくる。自分の出自や子供時代の諸々の体験をじっくりと辿りたいという欲求が生まれてくるとともに、ようやくそのための時間も持てる。しかしこうした現象が常に自発的に起きるわけではない。ドイツでは、コソボ紛争の間、2001年9月11日の同時多発テロの日、そしてアフガニスタンやイラクへの攻撃が続いている間などに、多くの年寄りの脳裏には何度も、自分では防御しようのない苦しみを伴って、戦争の記憶が蘇っていた。

メディアは、これまでより「ドイツ人の」犠牲者、「ヴィルヘルム・グストローフ号」の沈没、ドレーズデンの崩壊、逃亡、追放などに興味を示してきている。すると第二次世界大戦時の子供たちもまた、おそらくは彼らより年上の存命者がほとんどいないために、時代の証明者として浮上してくる。しかしだからと言って、この子供たちに関連づけて、ある一つの集団、あるいはその集団のアイデンティティーのことを語るのは時期尚早である。思い切って自分に問いかけたり、答えを探そうとする個々の例があるだけなのだ。ハンブルクの年金生活者、ルース・ベアーテ・ニルソンは、自分の内面世界を公表することですでに一步踏み出した。彼女は本来の自分に近づくために、また同世代の人間たちとの接点を探ろうと詩を書いている。いずれもそれまで彼女がほとんどできなかったことだ。彼女は自分が戦時の子供であることを意識して詩作する。

自由な落下

私は墜落したくない。

そもそも落下しないのが一番いい。

自由に落下すればどこに着陸するかわからないのだから。

私はとても多くのものをなくした。それは記憶から抜け落ちてしまった。

探しても何も蘇っては来ない。

私が求めるのは確実なもの。

もちろん確実なもの。

60年間も沈黙し語られなかった世界に、そもそも確実性のようなものがあるかどうかは、はなはだ疑わしい。けれどもそれは、憶測が霧のように行く手を阻む中で前進しなければならないという意味ではない。私たちは質問をすることも答えを聞くこともできる。しかも戦争時に子供だった彼ら自身の口から。彼らの運命が科学的に研究されていない以上、ほんの少数の心理セラピストとジャーナリストを除いて、彼らは私たちが接近できる唯一のエキスパートなのである。

そのエキスパートの一人がグードルン・バウマンである。彼女は1937年に生まれ、年金生活を迎えるまでバレエ指導者として働いていた。今でも彼女は、長い髪を首の後ろのところできゅっとお団子を作ってまとめる、厳格で正統派のヘア・スタイルを貫いていた。彼女は、何世代にも渡る多くの教え子たちに、子供時代からバレエを指導し、自分のスタジオに学んだ研究生の何人かは優れたプロのバレエ指導者になった。彼女たちは巡業公演で、初めての先生であったグードルンを思い出すのだろう。今でも教え子たちからの絵葉書が世界中から彼女の元に届くのだ。

グードルン・バウマンは離婚して二人の子供がいるのだが、仕事を辞めてから2、3キロ太り、特に腰やお尻の肉付きがよかった。彼女がそのような体型に慣れるのは難しいが、実際顔つきは変わり、表情はずいぶんと柔らかくなった。しかしこれはむしろ好ましいことだろう。と

いうのも、度々彼女は周囲の人々から、今の容姿の方が彼女という人間に似つかわしいし、そもそも人格がより柔和で生き生きとしてきたと言われるからだ。

それはあり得るでしょう、とグードルン・バウマンは言った。ここ数年、自分の内面世界は変わったのだから、と。自分の子供時代を再構成し始めてから、変化は現れてきたのだと彼女は語った。奇妙なことに、と彼女は続けた。自分の戦争の記憶は、まるでまったく別の人生から生じたように自分とはかけ離れているのだと。

記憶はどこにあるのか？

彼女は自分の子供時代を捜し求めて、かつての女友達や知り合いと多くを語り合った。いくつものキャンディーと何杯もお茶とともに。彼女たちはテーブルを囲んで、協力し合いながら自分たちの思い出を持ち寄り積み重ねていったのだが、その都度に明らかになったことは、グードルンがその作業に貢献できることが極端に少なかったことである。

「気づいたんです。私はほとんど毎日のように経験していたはずの戦争体験の一つ一つを、広範囲に渡って忘れてしまっていることに」と彼女は語った。「他の人々が繰り返し語る由々しき出来事が話題になっている時、私は、なぜ自分は何も知らないの？と自分に問いかけただけでした。それは自ずと、これもずっと前からの問いでしたが、なぜ私はこうもひどい記憶力なのだろうという疑問にぶつかるのです」。

インタビューでここまで答えた時、彼女は私がその後で質問しようとしたことに対して先手を打つように、はっきりと言い切った。「いいえ、そうじゃありません。歳のせいだなんてこと、まったく関係ないんです。反対です。今はむしろ記憶力は良くなりましたよ。でも、限られたものが記憶からなくなるんです。視覚的なもの、他にも私が興味を感じて夢中に関わったこと、そういったことが一週間後にはもう飛んでしまっています。いい事もなんですよ。愉快か不愉快かは関係ないんです」と。

あるクリスマスミサが終わってから、彼女が成人した息子に次のように言った時に、この状況が起こった。「本当に驚いたわ。あなた、すべての賛美歌と一緒に歌えたでしょ。何番でも、いえ一曲全部歌うことができたじゃないの。賛美歌を学校で教えてもらってたなんて考えもしなかったわ」「お母さん、何を言うの。歌はぜんぶお母さんが、僕たちと一緒に歌って、教えてくれたんじゃないか。『毎年ふたたび』をさ」

いつのことだったか、グードルンはある考えに行き着いた。彼女の悪い記憶力は、子供時代に母から、忘れることを何度も求められたことと関係があるのではないかと。今日でもそれは疑問の残る考えであり、確実なものなどでは全然ない。時々彼女は本当のことがわかったように思うのだが、その矢先にはまた疑い出してしまう。しかし、よりもよってそれほど乏しい記憶力しかない彼女が、どうして自分にこのような事を問いかけたりするのだろう。グードルン・バウマンは知っているのだ。彼女が子供のときに体験した事は、今の視点から見てもまさに惨状そのものだという事、そして何百万人の子供たちが、当時同じような惨事を体験したにもかわらず、このドイツの忘れっぽい世代が目立つことはなかったということ。

その後彼女は4歳の頃のある大きな体験について語った。「その時私はベッドに入っていま

した。爆撃の後で、街は赤々と燃え盛っていました。お向かいの家も全部燃え上がって、轟音を立てて崩れ落ちていました。今でも燃え上がって形を変えていく巨大な炎が目に見えます。恐ろしく不安だったことと、そんな中で母が叫んでいたことをよく覚えています。母は部屋に入ってきて、私の気を鎮めるために、少しの間私のベッド脇に腰掛けて、私に言ったのです。壁の方を向いて何も見えてはいけません。眼を固く閉じていなさいね、と。私は母にそこにいて欲しかった。でも母はまた部屋を出て行きました。母は出て行く時に、あなたは何も見なかったのよ、と言ったんです」。

彼女の故郷の町は軍港になっていたため、特に爆撃が激しく絶え間なく続いた。彼女の記憶には映像がほとんどない。彼女と同年輩の者たちには、自分が戦争中に見たものについて細かく描写できるが、当時それを見て感じたことについてはうまく語れないということがよくあると、グードルンは耳にした。しかし彼女自身はというと、まるで反対なのだ。彼女の場合は、当時の感情は記憶に残っている。「私は、その時私を驚愕させ、言葉を失わせた何かが起きていたということは覚えています。でもそれが何だったのかが分からないんです」。

私たちは何年も地下室に座っていた

グードルン・パウマンは嘆くことはしない。彼女は淡々と起きたことを語った。「人は事実をありのままに見なければなりません。私たちは何年も地下室に座っていました。そこでは座ることしか許されませんでした。寝ることなど考えられなかったのです。ですから私たちは朝はいつも寝不足で疲れていました。」

登下校の途中で空襲警報が鳴ればどうしなければならないか、彼女は分かっていた。とにかく急がなければ防空壕の扉は締まってしまい、中には入れなかったのだ。グードルンの身にもそれが起こった。「その時はもう戦闘機が飛んできて、私は一人で路上にいました。そして私は棒切れのように投げ飛ばされました。周囲には爆弾がたくさん落ちてきたんです。今まで私はこのことを誰にも話したことがありません。そして当時の記憶として残っているのが、母が私にいつも言い続けていた言葉、『さあ、ちゃんと陽気にしてなさい!』なんです。」

彼女の両親は彼女に、外交的で元気はつらつと話をする子供であることを望んだ。来客がある時などは、とりわけそうだった。ところが彼女は、自宅に誰かが訪問すると奥に引っ込んでしまった。後で両親からどうしてそんな態度なのかと問い詰められ、部屋の「隅っこに」追いやられて、そこで「恥を知り」、「自省する」ことを求められるのだと分かっているから、絶望的な気持ちで隠れた。彼女の両親は世間に対して、そんな「ダニ」のような子供を持っていることを残念に思っていたのだ。

今グードルン・パウマンに分かっているのは、彼女の「物を見ないこと」という特性は、どうやら爆撃戦の間に訓練させられ身についてしまったもので、結局その特性と、彼女はその後の人生をずっと戦わなくてはならなかったということである。「ずっと前から気づいていたのです。どうして私はそういう反応をしてしまうのだろう、どうして私はいとも簡単に物事から視線を逸らしてしまうのだろうと、いつも自問していました」。

自分の子供時代を思い返し始めた時、彼女は繰り返し夢を見た。その夢の中で彼女は、あな

たにはもっといい眼鏡が必要、大きな眼鏡が必要です、という声を聞いた。その後グードルン・パウマンは、物事を直視することを学ぶ時期が来たのだと思うようになった。今ではそれが記憶力をもっとよくすることに繋がっていくと信じている。

「私が自分の記憶力というものを信頼できていたら、今までの人生でいろいろなことができたでしょう」と彼女は、物思いに耽ったような落ち着いた声で言った。「若い時に思いました。私はもっと勉強をしなければ。本当に物事を知らないと。自分がそもそも障害を抱えて生きているのだということは、ずっと後になってようやくわかったのです」。

障害、それが彼女の私生活を絶えず困難にしていたものだった。大切な人間関係はそれによっていくつも壊された。彼女は本当に忘れっぽかったので、人々は彼女を信用できなかったのだ。しかし今ではどうだろう。彼女の周りの同世代の高齢者たちは、自分の記憶力が衰え、名前や出来事なども思い出せなくなっていることを自覚している。ところがグードルン・パウマンにあっては状況が逆転し、彼女が再び自分の子供時代を取り戻すにつれて、彼女の記憶力は良くなっているようなのだ。障害はなくなっている。ささやかな慰めであっても、不安感はかなり和らぐ。彼女の話や実際の振る舞いで、自分でもこれまでおかしいと感じ、気持ちの悪かったことの多くに今や意味づけができる。

彼女ははっきりと分かってきた。つまり彼女の子供時代に培われた学習プログラムは、「生きる」ためではなく「生き延びる」ための知恵であった。これらの関係性に気づかなかった間、彼女は「生き延びる」ための学習プログラムに規定されていたのだ。

戦争が終わったら、生への不安が襲ってきた

戦争が終わった時グードルンは8歳で、その時のことを彼女はよく覚えている。ある日の朝、彼女の両親は彼女に戦争が終わったことを告げ、それが何を意味するかを説明した。私たちはようやくパジャマを着てベッドに入ることが許されること、防空壕に急ぐ必要がもうないこと、一晩中ぐっすり眠ることができること、部屋を暗くする必要がないことなど、すべて彼女が望み続けていたことばかりだった。「けれどもそれから、私には何か怖いことが降りかかっているということが分かってきたのです。私が身につけていた知恵は、どう生き延びるべきかのためのものだったのですから。私は戦争とうまく折り合ってやっていました。おそろしいことですが、それができたのです。けれども、今私は無に向かって走っている、自分を守るための装備もせずにある状況に向かっていると想像することは、恐ろしいほど不安でした」。

これは8歳の子供の考えるようなことではない。ここで扱っているのは8歳の子供の人生経験ではなく、あくまでも今では〈大人になった子供たち〉の経験である。「以前はたくさんの死への不安に襲われていました。すべてがやっとまともな状態になるはずという瞬間に、今度は同じように恐ろしい生への不安に襲われたのです」。

今、彼女は過去の様々な出来事を新たに考え直しているが、彼女がしばしば事故に巻き込まれたという事実も、他の光に照らすと違って見える。不思議なことにその後の彼女は、入院していた時でさえ諦めたり不安になったりせずに、彼女流の言い方で言えば「心理的に並外れて頑強で自信に満ちて」いたのである。周囲はみな、彼女の、自分で言う逞しさに驚き称賛した。

けれども彼女の状態はそれとは何の関係もなかった。彼女は、苦しみの中でも満ちてくるエネルギーを感じていたので、気をしっかり持たなければならない必要がなかったのだ。実際、彼女は常に、外見から推測されるよりずっと早く健康を取り戻した。

彼女がそれまで面識のなかったある医者、ついでのように自分の一連の事故のことを語ったのは最近のことだ。その医者は尋ねた。「あなたはひょっとして、大惨事に慣れていますか？　そもそも楽な生活より悲惨な出来事とうまくやっていけるように、教育されてしまったのではないですか？　ひょっとしたら、自分の能力を高めるために、たまには悲惨な出来事に会うことを求めていますか？」

グードルンは「そうだと思います」と答えた。

彼女は厳しい規律を要求される職業につき、うまくやっていた。思い通りに単独行動することなど、どのみち彼女の性に合わなかった。彼女は情熱的なバレリーナになることはなかった。そのためには彼女の制御欲求が際立ち過ぎていたのである。けれども彼女はそれをバレエ指導者になることに活かした。

規律は彼女が生き延びるための戦略の一部であった。分かりやすく構成化された日常ときっちりとした規則や習慣が、唯一彼女の悪い記憶力を補ってくれたのだ。けれども人生には、いたるところで他の要素、例えば遊んで過ごす、楽しむ、信じるといった行為が求められるところもあり、そこでは彼女は損をした。この30年彼女はパートナーと別れて一人で生きてきた。これも悲しみ嘆く理由にはなり得ないと彼女は言う。二人の息子たちとは紛れもなくいい関係性を保っていて、ただ残念なのは彼らがやや「男女関係に奥手」で、そのために孫の顔を見ることなど問題外だということくらいらしい。

「息子たちは私には優しく、感じもよく、とても親切で、最近など私を褒めてくれるのですよ」と彼女は息子との良い関係について語っている。「ただ戦争中の私の個人的体験や、私の今の生活に、そして同時に息子たちの生活にも干渉してくる悲惨な体験だけは、彼らは聞きたがらないんです。そんな時長男は、まるでこれから眠るかのように目を閉じてしまいます」。母は、息子たちがそのような態度を取っても気分を害したりはしない。「息子たちが私から期待するのは私の別の姿なんです」。例えばそれは携帯電話で始まったのだが、彼女が息子たちを喜ばせることで、新しい電気機器を彼女が使うということ以上のものはない。「息子たちは最高に喜んで、朝から晩まで私に使い方を教えてくれるんですよ」。

学ぶこと、新しい知識を獲得することは彼女にとって喜びである。正確に言えば、それは彼女のお気に入りの活動の一つである。彼女は脳研究の認識を信頼していて、それによれば、人間の脳はかなりの高齢に達するまで変化を遂げるし、それにより新しいことを受け入れることができるのだ。

以前は強制的に、またプレッシャーをかけられることで学ぶことができたが、今はまったく違って、その観点で言えば、今はまったく自由だと彼女は言う。「私はこれまでの人生で、ずっと苦しめられてきましたが、今はほとんど苦しみがないのです。自分の子供時代より、今の若者より、はるかに楽なのです」と。

今彼女にはっきりと分かるのは、自分が幼少期から抑圧されていて、少なくともそれは彼女

が30代になっても続いていたということだ。心理療法の体験なら今日、手軽にできる。しかしその治療に戦争のトラウマを取り上げたものはなかった。自分の今の心身相関性のある苦痛を、彼女は比較的我慢できるものだと思っている。そして、すでに子供時代に彼女を困らせていた傷ついた場所に行き当たる度に、一週間どこかに閉じこもって思い切り泣きたいという衝動に駆られることもあるが、彼女は屈しない。「鉄の規律」でそれに立ち向かい、自分を支えるのである。

なぜ彼女は目的のはっきりしたトラウマ・セラピーを受けないのかと私が尋ねると、彼女は答える前にゆっくり首を振った。「そのことならすでに、少し私も考えました。でも結局思うのです。今となってはもうそんな目的は問題じゃないと。私はまだ二、三年はうまくやっています。なんといっても、今は比較的平和な人生を過ごしているんですから」。

彼女の頭の中には、今でも昔の考え方が潜んでいるのだ。つまり、そんなに大事に受け取らないで。あなたにそんな権限はないでしょ。親戚や知り合いが、何と云うか・・・、というものだ。